

楽器と願い乗せ 津波被災地へ

榎 一彦さん（二宮）

ガシャーン。大型トラックの荷台が音を立てて施設されると、運転手が声を上げた。「それでは行ってきます」
うなるエンジン音にキーン

ボードの音色が重なった。サザンオールスターズの「希望の轍」のイントロだ。《夢を乗せて走る車道》東日本大震災から4カ月後の2011年7月11日。



被災地に贈るために集まった楽器。中には新品もあった＝FMヨコハマ提供

この日に放送されたFMヨコハマの番組「THE BREEZE」では、トラックが川崎市内の倉庫を出発する様子が紹介された。現場で出発を見送った二宮町の榎一彦さん(58)は歌詞と重なる情景にこみあげてくるものがあった。トラックに積まれていたのは、被災地の子どもたちに贈るために集められた大量の楽器だった。

当時、大手運送会社の横浜市内の店舗に営業職として勤めていた。震災から3カ月ほど経ったころ、取引先のFMヨコハマからこんな依頼が舞い込んだ。「被災地に楽器を贈るキャンペーンに協力してもらえないでしょうか」
当時、多くの同僚が救援物資の輸送などの応援に入り、職場は人手不足だった

震災4カ月 集まった438台



FMヨコハマの「楽器を贈ろうキャンペーン」に携わった榎一彦さん(右)と加藤直裕さん(左)＝横浜市西区

★希望の轍
務めた映画「稲村ジェーン」の挿入歌。1990年リリースのアルバム「稲村ジェーン」などに収録。地元の要望を受け、2014年からJR茅ヶ崎駅のホームの発車メロディーにも採用されている。

が、直属の上司から「迷っている場合じゃない。被災地のためにやるしかないだろ」と背中を押された。企画を発案したのは「THE BREEZE」のフロデューサーをしていた加藤直裕さん(57)たち。加藤さんは震災前、2年ほど営業職だったことがあり、榎さんとも面識があった。大学まで吹奏楽部でトロンボーンを吹いていた加藤

吹奏楽の楽器を集めて被災地に届ける「楽器を贈ろうキャンペーン」を始めたところ、県内約20カ所の受付場所に連日、楽器が届けられた。榎さんも時間が許す限り楽器を直接受け取り、毎日ミニバンを運転して一時保管場所まで楽器を運んだ。集まったのは、トランペットやクラリネット、譜面台など。一つひとつにメッセージを添えてもらった。中には傷一つない新品もあった。

榎さんの作業は深夜まで続くこともあった。でも「持参した人たちの思いに込めたかった」。
想定を大きく上回る楽器が集まり、438台が被災地に贈られることになった。会議室いっぱいになった。桑田佳祐さんが監督を務めた映画「稲村ジェーン」の挿入歌。1990年リリースのアルバム「稲村ジェーン」などに収録。地元の要望を受け、2014年からJR茅ヶ崎駅のホームの発車メロディーにも採用されている。

聞き直した。

番組のDJが楽器に添えられたメッセージを読み上げる。亡くなった両親が買ってくれた品です。みなさんの思い出の一部になるよう、役立ってくれたらうれしいです」

「フルートを吹く喜び、アンサンブルの楽しさはいくつになっても最高の幸せをもたらしてくれます。そんな幸せを運んでくれることを心より願っています」

「娘が病氣と向き合ったとき、いつも共にいた品です。東北の皆さん、一日も早く日常が戻ることを祈っています」
トラックが出発して「希望の轍」が流れる場面、2人の目に涙があふれた。あの日、楽器を積んだトラックは一人ひとりの思いも乗せて、被災地へと走った。

いま、あの楽器たちはどこにあるのだろうと榎さんは思いをはせる。「誰かが大切に使ってくれているといいな、と思います」
(小林直子)

